



## 新しい高校地学の教科書 —現代人のための高校理科—

杵島正洋, 松本直記, 左巻健男

講談社ブルーバックス 365頁  
定価 1,150円 (税別)

教科書  
お薦め度

☆☆☆

本書は、話題となっている「検定外」教科書の一つである。一般書店で「検定」教科書を手に入れることは、極めて難しい。それどころか、久しく地学の「参考書」も書店で見かけない。やっと、大学入試センター用の問題集が数冊、確認できるくらいである。高校の教育課程から地学が消えるかどうか、いろいろな憶測がされているが、確実に負の循環は深まっている。とにかく、シリーズの一つに地学が加えられたことは喜ばしい。検定教科書が大判、カラー化されているのに対して、内容勝負のモノクロ新書という渋い作り方である。

「ゆとり教育」という名の下に、指導内容の「精選」が行われ、理科だけでなく、あらゆる教科・科目の贅肉が落とされ、教養どころか、ワイドショー的なものしか残らなくなったと嘆かれている。その反面、テレビと言え、意外に科学モノの番組は人気らしい。もの足りない学校教育の結果、今まで当たり前だった科学的な素養をネタに番組が作れるという状況なのかもしれない。本書には、古き時代に、こってり、ねっちりと語られた内容が、ほとんど入っている。「このネタは、使ったことがあるぞ」、思い出してニヤリとする箇所がいくつもあった。文面はベテラン教師の授業を聞いているかのごとく、すこぶる滑らかである。逆に図版は、定番のものが目について鮮度が足りない気もした。気になる天文分野の内容は一新と言ってよい。現時点での到達点が惜しげもなく書かれている。研究の最前線の雰囲気が伝わってくるような語りである。執筆者が、のびのびと

妥協なく書いているようすが伝わってくる。これはうれしいことだ。さすが検定外だと感じた。

さて、本書から地学という科目の体系を感じとれるだろうか。博物学的で、寄木細工的で、全体像が把握しにくいという批判の多かった科目に、太い柱を立てることができているだろうか。本書の扉ページに編者が書いているように、実は「復古調」である。しかし、あえて検定外教科書に求めたいのは「思想」ではないだろうか。地球から宇宙まで続く時空間のシームレスなつながり、連続性を示して欲しかったと思う。天文分野と他分野のつながりが見えにくい。地球惑星科学という観点を、もっとダイナミックに展開して欲しかったと思う。さらに、「数式」を排除すべきかどうかである。出版元との協議があったのだろうかと思うが、やはり自然科学の教科書と銘打つからには、付録ページでもいいから、数式をつけて欲しかった。そして、「観察してみよう」がない。あくまでも読者は受動的である。星を眺めたいくなる、地面を掘りたくなるようなページが欲しい。それが検定外的な誘惑(?)であれば、もっとうれしい。

何やら要望、苦言ばかりのようで申しわけないが、本書が出版された意義は非常に大きい。それだけに、あれこれと思いは募るのである。地学に興味をもつ高校生、地学を履修せずに大学で地球科学、天文学関係の学科に進もうとする教養部の学生、気軽に科学したい大人にとっても絶好の書である。

鈴木文二 (埼玉県立春日部女子高等学校)